

現代日本の短編作家シリーズ19

# My Lost Childhood

Kouko Nakajima

中島 公子

近代文芸社



現代日本の短編作家シリーズ 19

# My Lost Childhood

中島  
公子

近代文芸社



目次

《My Lost Childhood》45

坂と赤マント 5

乳の実 21

回復期 39

弁天の仇討 55

あとがき

初出一覧



## 坂と赤マント

その坂は、電車通りからあがってきたまっすぐな道がゆるやかな勾配とともにしずかにくねりながら、「……下」と名のつく日蔭のごみごみした街並みへ向かってくだりは始めるその頂点の辻から、ちょうど箱をからげた縄のあまりのようひょいとわきに投げだされた形で下にのびていた。戦災前の東京の山の手にある閑静な屋敷町の一隅のだが、高名なプロレタリア作家が代表作のモデルにした巨大な印刷工場とそれを取りまくスラム然とした貧しい労働者の居住区もまた、そこからわずか数十メートルのところにもうはじまっているのだった。

長い坂ではない。くだりきると、先年北関東の山麓にできたT大学の前身東京K大学が元の高等師範学校、その上置きであるB大学と呼ばれていたころの広いキャンパスをかこむ高い塀につきあたる。それを右手に沿ってまわれば、道はまたしだいに曲折しながら徐々にあがって高師の大きな正門のまえを通り、やがて『女子アパート』という金文字の光る赤煉瓦の十階建

ての建物でふたたび大通りに通じる。そこが「B大前」という市電の停留所だった。

坂の頂点を右に折れたところに住んでいた弘子は、電車通りからの道をさらに奥へ二、三軒はいったところに住む同級生の那奈ちゃんと、坂の上で毎朝待ちあわせて学校へ通った。小学校三年生ぐらいのころである。「B大前」から弘子たちの学校までは停留所一つという距離であった。

それは弘子がかぜを引いて二、三日お休みをしたあとの朝だった。弘子より背は低いが頑丈なからだつきの那奈ちゃんは、かけっこも早く、万事にすばしっこくて、まりのようによくはずむ体をまめによく動かした。おしゃべりするときも円い目をいっぱいに見開いてくるくる動かし、指をつきだしたり首を振ったり、ときにはぴよんととび跳ねたりしながら体じゅうで話す。まじめくさって「だれにも言っちゃだめよ」と念を押しながら、弘子以外には知らぬものななさそうなここ二、三日の学校のできごとを話してくれる。そのなかに二日まえの朝礼で教頭先生がなさった訓示の話があった。先生の訓示など、およそ二人の話題にはなりにくいものなのに、今朝は話す方も聞く方も熱がはいった。というのが、それは「赤マント」の話だったからである。

「赤マント」というのは、当時東京の小学生たちのあいだに恐怖をばらまいていた噂の主人公だった。子供をつかまえて理由もなく死に至らしめる通り魔のことであった。むろんその噂は



弘子や那奈ちゃんのクラスにも、弘子が学校を休むずっと以前にとどいていた。彼女らの学校にこの通り魔の犠牲になったものはいなかったが、親戚の子や近所の遊び仲間から耳ざとく情報を仕入れてくる者はいくらでもいたから、犯行の模様などもまことしやかに伝えられていた。だいいちそれをなぞって子供たちの間では「赤マント遊び」が大流行していた。朝礼の訓示で子供の世界の流行が問題にされるのはめずらしいことだが、当時「赤マント」は新聞だねになった。道ばたに蒼白になって倒れている子供があちこちで発見され、「赤マント遊び」は社会問題となっていたのである。訓示はその新聞記事に触発されたのであろう。

夕方、一人歩きの子供のまえに、黒いマント姿の男があらわれる（「赤マント」のマントは黒いのである）。男はただ立っているだけだが、子供は足がすくんで逃げることができない。全身が痺れ、息をするのがようやとだ……。

「男」がたずねる——赤マントがいいか、青マントがいいか？

できるだけ早く、はっきりと、「青マント！」と答えなくてはならない。「青マント」と答えれば、子供はその場に失神して倒れるだけですむ。が、「赤マント」と答えたら、あるいは黙っていたら、子供はあとで血まみれになって発見される。男は殺人鬼なのである。

どういうわけか、狙われるのはすべて男の子であった。当然「赤マント遊び」も男の子のあいだに流行した。いや「遊び」なんていってはいけない。それは練習なのだ。子供たちは本物

のマントの男が目のまえにあらわれたとき、あがらず、大声で「青マント！」とどなることができよう、箆笥からお父さんの二重まわしや兄さんのマントをひっぱりだし、空地にあつまっては、かわりばんこに「赤マント」になって練習にはげんだ。

そのせい、鮮血にまみれて発見された被害者はほとんどいなかった。道ばたに目をまわしてひっくりかえっている子供は、倒れるまえ、「青マント！」と絶叫したことをのちに誇らしげに報告したものだ。

この種の、文字どおり「子供だまし」のこわい話というものはいつの時代にも子供の世界を横行している。だが社会問題化するほどに流行したのは、あの時代、あの時期だけのことだったのではないか。どんな原因がかさなったのか知らないが、今にしてふりかえてみると、それは日本が米英を相手に戦端をひらくまえの、重苦しく沈滞してなにかしら血なまぐさいものを求める当時の世相をどこか映しだしていたもののような気がする。

その作り話の発端は、幼い弟を恐がらせてやろうと考えたいはずら好きの中学生あたりであったのだろう。だがナンセンスで同時にちょっぴり嗜虐的で頹廢の匂いのあるこの通り魔の話は、「明日の日本」を背負う青少年の育成に心をくたく教育者にとってはなおざりにできないものを含んでいたにちがいない。さらにこの流行を悪用した実際の犯罪の可能性を考えるなら、ひとこと注意の要ありと教頭先生が判断したのも当然であろう。このばかばかしい「話」とそ

れにもとづく「赤マントごっこ」を以後本校の児童がすることを固く禁ずる、というのが訓示の主旨であった。

ところが、さてこの種の訓示ほど逆効果なものはない。「先生がおっしゃるくらいだから、あの話はホントのことだったのだ……」と那奈ちゃんは目玉をむきだしそうにしながら言い、弘子もあごが痛くなるほどふかくうなずいた。おとなが「ウソだ……」といえ、たいいていその嘘は本当なのだ。これほどたしかな保証はなかった。これまで弘子は、「赤マント」が女の子には関係ないことなので、その噂をあまり身近に感じたことがなかったのだが、その黒いマントの男の影は先生の訓示でがぜん実在性をおび、ぐんぐん大きくなって、弘子と那奈ちゃんの脳髓を完全に占領してしまった。

その男はきつと背が高く、シルクハットをかぶっているのだ。黒いマントには音楽室のグラウンド・ピアノにかけてあるしゅすのカバーみたいなまっかな裏地がついているのにちがいない。子供が恐怖にももの言えず、ただ立ちすくんでいると、「男」はそのマントをぱつとひるがえして子供をその緋色の布に包みこみ、なかで鋭いやいばが子供の肉を引き裂くのを外にはちらりとも見せないのだ。陽はすでに落ち、しかしまだ街々に灯のともるまえ、藍色に昏れなずむ都会の片隅の人けない舗道に、犯罪は音もなく、あたりの空気を一瞬かきみだすだけに終わるのだろう。なま温かい風が血の匂いを人びとの鼻さきにはこんで行くころには、赤マントの姿

はかき消えているにちがひなかった。

教頭先生はなんだってあんな話をしたんだろう。それはきつと男の子がいざというときみんな落ち着いて、だれか友だちの兄さんでもからかい半分にやっているのだ、と思ひこみ、らくらくと「青マント！」と答えられるようにするためだ。そのためにアレを遊びだなどといって安心させようとしたのだ、と那奈ちゃんは言った。那奈ちゃんはかけっこだけでなく頭の回転も早かった。弘子が疑問に思うことにはたいていぱつと回答をみつ付けてくれる。弘子は感心してその説明を聞いていた。

話に夢中になつたまま坂をくだり、B大の塀に沿って電車通りの近くまでやってきたとき、ふつと弘子が立ちどまつた。那奈ちゃんの洋服の袖口をつまんでひっぱつた。

「どうしたの……?」

と言いかけて、相手もハッと息をのみ、

「……そうだ」

「ね?」

「忘れちゃった」

「引き返す?」

「ウン」

女の子二人は向きを変え、いま来た道をもどりはじめた。背中のランドセルがカタカタと音をたてた。この二人には、二人にだけ通じる一つの儀礼的習慣があつて、今朝はそれをし忘れたことに気づいたのである。

その儀礼的な行為をおこなう場所は、例の坂道のちょうど中ごろにあつた。道のまんなかに、道路の舗装の過程でできたものらしいしみがある。コールタールの塊がかさぶたのように盛りあがっているのだが、それはちょうど羽を広げたこうもりのような形をしていた。坂をおりる途中、そのしみをかわるがわる靴で踏んづけて行くのが二人の習慣だつた。こうもりは坂の下から上に向かつて飛んでくるような形をしていた。その胴体にあたるところを二人して拍子をとつて、トントンと踏みつけると、胸がスツとして一日が調子よくはこぶような気がした。二人のうちどちらがどんなきかけではじめたことだつたか、もうおぼえてはいない。だが、忘れたら引き返してでもその行為をはたしてこないと、禍わざわいが起ると信じていた。行進中歩調をとるときのように膝を持ちあげてからトントンとかかとを踏みならずと、どこかで「キキキ……」とこうもりの泣く声をするような気がした。

弘子と那奈ちゃんは来た道を逆にたどつた。朝日があたって目にしみるような白塗りのB大の塀を左手にすると、右側に煉瓦塀のかなり豪壮な邸宅があらわれる。『夏目』と書いた表札がかかっている。

重い板戸に大きな金属のびょうを打ちつけた門扉は、この朝もそうだったが、弘子たちが通るときはたいはいびたりと閉じられていた。が、たまに開け放されていても、そこから人を奥にいざなう敷砂利のうえには黒っぽい木立が覆いかぶさっていて、おそらく堂々たる西洋館なのである。邸宅の建物は外からほとんど見えない。古びた赤い煉瓦塀の角が坂のはじまりである。坂の片側は全面その夏目家の塀が占めていた。

もう一方の側もだれかの屋敷の塀なのだが、弘子はそれが何という家なのか知らなかった。坂下を夏目家の門とは反対にさらにおりて行けば門にであうのかもしれないが、弘子はその道をほとんど通ったことがなかった。あるいは弘子や那奈ちゃんの家のある坂上のどこかに、その家の門に通じる小路があるのかもしれない。だがその家は実際弘子にとっては、坂の片側をなしているという事実と、途中に高い片扉の出入口と小さな石段があつて、学校帰りにときたまその石段を、那奈ちゃんとおしゃべりするための腰掛けに利用するというほかには、なんの興味もない存在だった。すすけた灰色の石塀で、日が当たらないため下の方はじめじめと苔がはえ、古びてはいるが華麗な夏目家の煉瓦塀とは対照的に陰気だった。

さらに、その暗くうす汚れた石の塀の頂上には、こわれた空壇などのガラスの破片がびっしりと植えこまれていた。戦後建てられた家でこうした異様な造作を施されたものはあまりみあたらないが、以前は金持ちらしい家の塀によくみかけたものだった。住む人のうそ寒い心の底

が見え透くようで、弘子がなんとなくその家がきらいなのは多分にこの埃をかぶったガラス屑のせいであった。

学校におくれないよう小走りにもどってきた二人は、さして長くもない坂道をなかほどまで一気にかけてあがって、ハテ妙な気分になった。毎朝欠かさず踏んできた道路のしみ——あのころもりが、ない。なくなっている。話に夢中になってはいても、動作はほとんど反射的に身についていたものだ。さっきそれをし忘れたのは、しみがなくなっていたからなのだ。弘子はあわてて那奈ちゃんを見た。那奈ちゃんもランドセルをつきだして背をまるめ、きよろきよろ足もとをみまわしている。前に言ったようにそれはただのしみではなく、かさぶた状に盛りあがったものなのだから、うすれて見えなくなるにしても、そう一きよにというわけにはいかないだろうに……。

気がついてみると、それはほんとうに暗くて陰気な坂だった。いつもは下の明るみをめざして行くので、両側の塀にさらけ覆いかぶさる樹木のためにほとんど日の射さない、木蔭道のよくなその西向きの坂の暗さを感じることは少なかった。だが今日は明るいところからもどってきただけに、その細い通路の暗さは異様なほどだった。暗さに目が馴れないため、道路にできたわずかなしみなど見おとしてしまったのかもしれない。

もういっぺん坂の上までもどって、はじめから歩き直すことにした。こんどは二人とも黙り

こくり、足もとを見ながらゆっくり歩いた。例のしみだけではなく、道路の表面がいつもと変わっているかどうかにも気を配った。ガラスの破片の家の石段はこうもりのいる場所にちかく目印になるものだったから、そのあたりまでくると立ちどまり、くまなく道路を点検した。

ふしぎなことに、道路は改装された様子もなかった。ただあのしみだけはどうしてもみあたらない。はじめからそんなものはなかったかのように、坂道はうす汚れてひっそりしていた。

そういえば、人のゆききもあまりない坂であった。弘子は二、三日まえ熱のた晩、うなされたいやな夢にもこの坂がでてきたのを思い出した。下から弘子がのぼってくると、ふとった労働者風の小父さんがおりてきた。両手をポケットにつっこんでいる。すれちがおうとして弘子が右へどくと、小父さんも右へ動く。左によけようとすると小父さんも左へまわる。どうしてもすれちがうことができない。でっぷりとした男のつきでた腹がぐんぐん弘子の顔にせまってきた、こちらは冷汗を流しながら右へ左へと必死で小さな体を動かす。男はもう動かないで、両足をふんばり、大きな手をポケットから出してかわるがわる弘子の行く手を通せんぼする。果実でももぐように顔をその手にもぎとられてしまいそうで、弘子は恐怖に身も凍るようだ。夢中でかぶりを振る拍子にふっと顔をあげると、男の首は箱のふたのようにパカッとうしろにはずれて見えなくなった。首のない、胴体だけの男の上に空がひろがっている……。

そんな夢をみたのも、この坂で人に行きかうことが少なく、たまに一人で知らない人と出会



うのが気分のよいものでなかったからだろう。那奈ちゃんといっしょでないときは、行きも帰りも電車をずっと歩いて、ひとりでこの道は避けることが多かった。

うすきみわるくなつた弘子は、もういちど那奈ちゃんの袖をひっぱった。

「学校におくれるわよ……」

「ウン、それじゃ、学校に行こう……」

相手もきみわるそうにもういっぺん足もとを見まわしてから、歩きだした。どちらからともなく、手をつないでいた。

大通りまで出ても、二人は黙りこくっていた。電車通りは明るくて、朝の澄んだ空気のなかを市電が音をたてて走っていた。並びたつ商店のあちこちで戸が開かれ、掃除する人影が動き、店先に水を撒く音がして、町は快い勤勉なりズムをかなでていた。

M会館と名づけられる高等師範の校友会館のまえをすぎるあたりで、那奈ちゃんが口をきつた。

「アレはね、あのこうもりは赤マントのかくれ場所だったのよ」

「エッ」

とびっくりして顔を見ると、彼女はいきおいこんで話しはじめた。

「赤マントはね、いそいで逃げてくるの。人目についたらたいへんだから。いそいで、いそいで、

で走ってくる。そしてあの坂のまんなかで魔法をつかうの。かかとでくるとまわるとね、ス  
ーッと地面に吸いこまれちゃうの。そこからあそこ大きな家のお庭に抜けてでてくるんだわ。  
こうもりは赤マントが地面に吸いこまれるところにあつたのよ。マントのあとだったのよ。だ  
けど教頭先生までが赤マントを追っかけはじめたから、赤マントはかくれ場所をかえたんだ  
わ」

「フーン」

弘子はすっかり感心してしまった。あれはマントのあとだったのか。そうか、そうにちがいで  
ない。道路の表面にわずかに盛りあがつたその黒っぽいしみは、マントを風になびかせてかけ  
あがつてくる人の姿に見えないこともなかった。一夜のうちに拭ったようにそれを消しさって  
しまうことは、そのふしぎな人物でなくてはできそうもない気がしてきた。

「それじゃ赤マントはあの二つの家のどっちかに住んでいたのかしら？」

「そうよ。知らなかったわねえ……」

と那奈ちゃんは感にたえたように言った。ほんとうにたいへんなことを知らずにいたものだ。  
しかし住んでいたとしたらどっちの家だろう？

「それは夏目さんよ」

ときっぱり言いきると、那奈ちゃんは声をひそめ、

「だれにも言っちゃあだめよ。あのもう一つの家は田代さんといってね、もとケイシソーカンだったのよ」

と言った。

「フーン」

と弘子はもういちど感心した。元警視總監の隣家にかくれ家にえらんだ赤マントの度胸のよさが快かった。

「夏目さん」の方にちがいない、と弘子も思っていたのだ。夏目邸の赤い煉瓦塀は陰惨な殺人鬼のかくれ家にはふさわしくないが、魔法をつかって地面に吸いこまれるマントの男にはよく似合う。林のように木立の多い、その広い庭の片隅、霧にけぶる地表から音もなく抜けだしてくるその姿を想像すると胸が高鳴った。男の子はうらやましい。赤マントに会うことができるのだもの。でも彼らは、赤マントが夏目さんのお屋敷に住んでいたことは知らない。知っているのは那奈ちゃんとわたしだけなのだ！

弘子はいっぺんだけ夏目さんの家から出てきた人に出会ったことがある。粉雪の舞う寒い日で、弘子は何かの理由で早退けをして、ひとりで家に向かうところだった。灰色の空にお午の「ポー」が鳴った。そのとき鳩時計のようにくぐり戸を押し、和服姿の、下駄ばきの男がでてきたのだった。ちょっとびっくりしたものだから、その男の風体を弘子は目にとめたのだ。

四十がらみのやせた男だった。寒そうにふところ手をしていた。櫛目のはいらなばさばさの髪とがった肩が印象的だった。文士風……とでも言うのだろうか。目の鋭い、蒼い顔をして、なんだか胸でも病んでいそうな感じだった。気がつく例の坂のつつきにやはり和服で地味なみなりをした女の人が立っていた。男を待っているようだった。傘で顔をかくしている。男はそばに寄って二こと三こと言葉をかわしていた。それから羽織の袖を大きくはらうようにして手を出すと、なにやら女に手渡した。それを、持った手提げにそそくさしまうと、女はひとりで歩きだした。すぐ男が追いつき、二人は並んでそのまま坂下の町の方へくだって行った。それはかくべつ記憶にのこるような光景でもなかったが、弘子は赤マントの話につられてなんとなくそのときのことを思いだしていた。

「赤マント」はどうして男の子ばかり狙うのだろうか……という疑問がふと弘子の頭にうかんだ。赤マントが男の子を狙うのは、男の子が憎らしいからなのだろうか。それとも愛しているからなのだろうか……。

こんどの疑問にはさすがの那奈ちゃんもおいそれと回答をだすことはできないようであった。教室で先生に指されて答えられないときのようには、おでこをへこませて同じ鼻のさきを指でつまんでいた。それからやおら弘子のほうに向き直ると、考えこんだ表情で、

「だれにも言っちゃ、だめよ」

と念を押し、

「もしかしたらね、赤マントは敵国のスパイなんだわ……」  
と言った。

弘子たちが物心つくころから大陸での戦争はずっとつづいていて、日本は△銃後▽であった。男の子はやがて兵隊さんになる。一人でも兵隊さんをへらしておこうとする赤マントは敵国のスパイだ、という那奈ちゃんの推理なのである。

こんどの説明は、あまり弘子を感じさせなかった。命を奪うほどに激しい愛とか憎しみとかいったものを、みもしらぬ少年に対して感じるこのふしぎさが、弘子の心を占めていたのだ。それにだいいち〈敵国〉ってどこのことなのだろう？ 蔣介石のこと？

「そりゃもちろん、ソビエツトか、ゲー・ペー・ウーだわ」

という答えがはねかえってきた。自信をとりもどした那奈ちゃんは、もとの朗らかな顔つきにもどって目をかがやかせると、靴の爪さきでピョンと立ってみせた。

二人はもう学校の昇降口にたどりついていた。革靴をズックにはきかえながらそんな問答をかわしているのだった。

昇降口はだいぶ混雑していて、もうすぐけたたましい始業のベルが鳴りはじめるところだった。



## 乳の実

「開け！」という号令で小学生は運動場にちらばり、両腕を横にのばして間隔をとる。毎朝、授業のまえにかならず朝礼があり、朝礼にはかならず体操があった。だが月のはじめの日は、体操に先だって「宮城遥拝」をすることになっていた。体操の間隔に「開い」た子供の集団は、また先生の号令でいっせいに廻れ右をし、宮城すなわち皇居の方向にむかって気を付けの姿勢をとる。太もものわきに掌をびたりとつけて胸をはり、「ヨウハイッ」という声とともにその手をそろそろと前にもって行きながら頭をさげはじめ。手が膝下にとどいたところで動きをとめ、一呼吸してからまたそろそろと上体をあげて行く。起こした視線が一点に集まる空の一角には、朝日を浴びて枝を八方にひろげた大きな銀杏の樹が、堀ごしに校庭を見おろしていた。小学生は、銀杏にむかって最敬礼しているようなものだった。

「あの銀杏に目をあわせなさい」

選擇の仕方を教えるとき、先生はそう言った。

「あれが宮城の方角です」

その銀杏とは、弘子は幼稚園時代からのなじみだった。広い小学校の隣というよりは裏手に接したところにあるその幼稚園は、小学校よりも歴史が古いと言われていた。蔦のからまる煉瓦造りの校舎の中はいつも暗くて、廊下のつきあたりや教室の入口の上部に嵌めこまれたステンドグラスが、昼の明るさをいつも夕暮のようなにび色に変えていた。藤棚、築山のつっじ、燃えるような紅葉にいろどられる「お庭」も、幼稚園の園庭というよりはむしろお邸の庭のようで、銘仙の着物に青い袴をはいた束髪の先生と、「園児服」ではなく白いエプロンをつけた男の子、女の子がそこに遊びたわむれるのを、大銀杏は足もとに見おろしていた。築山の裏の細い小道が、銀杏の根かたの、コンクリート塀にかこまれた小さな空地に通じているのだった。樹齡二百年といわれるその老木には、子供が二人くらいはこめるようなうろろができており、子供たちが手をつないでその木をかこむには、幼稚園一クラスの人数では足りなかった。

先生に連れられてでなければその空地へ行ってはならないことになっていたが、弘子たちはときどき、女の子だけでこっそりそこへ行つて遊んだ。築山でままごとをしていると、男の子たちがそこを駆け抜けて、何もかも蹴ちらして行ってしまうからだった。夏は空地をすっぽり



と蔽う木蔭が、冬は葉をおとした枝の間を縫ってふりそそぐ陽光が、子供たちを庇護するように包んだ。

その空地へは幼稚園側からしかはいれなかったから、小学校入学以来、弘子は銀杏と疎遠になった。先生が宮城の目標に銀杏を指さしでもしないかぎり、それが意識にのぼることはほとんどなかった。

「宮城遥拝」はそんなわけで弘子に、大銀杏の蔭のしんとした涼しさや、日だまりの溶けるような暖かさを思い起こさせた。はなれてみる銀杏は日ごとに装いを変え、しかもいつでもなつかしさを誘う同じ姿形で空にあった。風雪にさらされたその樹肌の衰えからは想像できないほど、遠目には若々しく、華やいだたたずまいを見せていた。虚空にそそり立つようでないながら、どことなく優しさのただようのは、それが秋になると乳の実とも呼ばれるぎんなんをたくさん実らせる女銀杏であるせいだったろうか。

その日のお昼休み、弘子は次の授業で使う地理の教材をとりて教員室へ行っていった。教材を先生がそろえている間、ぼんやりと窓ごしに運動場を眺めていた。初冬の、朝礼のときには隅の方には霜のおりていた校庭も、午前中の日差しにぬくもり、そのうえさつきから少し風が出はじめていて、乾いた地面に土埃が立っていた。その風のなかを、子供たちが走っていた。

ただ駆けまわって遊んでいる、というのではない。一点に吸いよせられるような走り方だった。何か、起こっている。弘子の目もそれを追った。

運動場のほぼ中央に、高学年らしくみえる男の子たちが大ぜい集まっている。集まる、というより、一かたまりになり、重なりあって、<sup>うずたか</sup>堆い山をなしているようにみえる。そしてはげしく、うごめいていた。折り重なるようにして、何かあるものの上におそいかかっているのがあった。かたまりの外にいる子供も、なんとかして中に割りこもうとして周りを駆けまわっている。棒倒しみたい……と弘子は思った。

ストーヴを焚いている部屋の中は暖かくて、窓ガラスをふるわせる風の音をのぞけば、外の物音は何一つはいつてこない。音のないその光景は、かえって異様であった。「何をしているのかしら……」弘子はいっしょにいた友だちをつついて、外を見させようとした。そのとき、あわたましい人声と廊下を走る音がして、ドアを蹴やぶるような勢いで、四、五人の女生徒が駆けこんできた。

「田沢先生……」

弘子と同じ五年生だが、クラスはちがう三組の女生徒だった。担任の若い男の先生はその殺気だった気配におされてすでに立ち上がっていた。

「どうしたんだ？」

「組中で大川さんをやっつけてるんです。ものすごいんです。やめさせてください、先生」  
先生の顔に、ふっと不快な表情が横切ったように弘子には見えた。

「何をしたんだ、大川は」

「内山さんのお弁当が盗まれたんです。大川さんが食べちゃったんです」

「またか……」

と言った。その声は小さくて、自信なげであった。

「……しかし、さっきは誰もそんなことはいわなかったじゃないか」

「毎度のことですもの。いちいち先生には言わないんです。お昼のとき、わかつてはいたんですけど、内山さんにはほかの人たちがわけてあげて……大川さんは例によって知らんかおして自分のお弁当食べてました。ほんとにお弁当どろぼうがうまいんだから……ずいぶん皆して見張ってるのに、どうしても現場をおさえられないでしょ？ いつのまにか食べられちゃってるんですもの。だから、今日は黙ってて、あとから全員でやっつけるって相談がまとまって……」

「それじゃあ……大川は自業自得じゃないか」

「それはそうですけど……でも、先生、今日は組中の男子が本気でかかっているんですから、もう、なんていうか、ものすごいんです。あたしたち、もう、こわくてこわくて……あのままだ

と、大川さん、殺されてしまうわ」

その言葉につられたように、別の女の子が声をあげて泣きだした。田沢先生は窓の外を見や  
った。人だかりが山をとりかこみ、様子は遠くからではよくわからなくなっていた。土埃が子  
供たちの足もとを走り、地べたに組み伏せられている少年の目や鼻を、固い運動場の土がふさ  
いでいることを想像させた。先生はそのままガラス戸を開けて外へ出た。両手をズボンのポケ  
ットにつっこみながら、そちらへむかって、はじめはのろのろと、途中から小走りになって近  
づいて行った。

教員室の中にもざわめきが起こっていた。窓際に立って様子を見ようとする先生たちがふえ  
たため、弘子のいるところから外は見えにくくなった。しかしまもなく昼休み終了のベルが鳴  
って、外で遊んでいた子供たちも校舎にもどり、弘子も教材をもって、友だちといっしょに教  
室へもどって行った。

「お弁当を食べちゃうっていうだけじゃないらしいわよ。あれだけ嫌われるには、嫌われるだ  
けのことはあるんだって。すごく性質がねじくれているんだって。女の子にも同情する人はいな  
いみたいよ。タイセンはみんなに嫌われているのよ」

タイセンというのは、大川岩夫というその少年のあだなであった。大川という苗字を音読み  
にして濁点をのぞいた呼び方には、あきらかな憎悪と蔑視がこめられていた。そこに当時の植

民地朝鮮半島に対する日本人の深い差別感がうっしだされていたことまでは、弘子にもわからなかったが、そこにこめられた集団の憎悪のどすぐろさは、子供らしからぬもののように思えて弘子には恐ろしかった。岩夫と朝鮮の間にはなんの関係もなかった。それは弘子の幼稚園時代の同級生で、当時から人とあまりまじわらない暗いところのある子だった。顔色がわるく、眉間にたてじわがあるのが特徴だった。

しかし少年が異常なほど周囲に憎まれるようになったのは最近のことだった。それまでおとなしい、目立たない勉強好きの少年だった大川岩夫は、ある頃からふいにタイセンというものに変貌したのである。

タイセンは、痩せさらばえていた。膝やひじの関節が切り株のようにごろりとつき出ている、青黒く変色した皮膚は、骨にへばりつき、垢で蔽われていた。白っちゃけた顔に眉間のたてじわは刀傷のように深く、くぼんだ眼窩から、険しい目が光っていた。そしてタイセンは、ひどく汚らしかった。弘子たちの学校は制服が定められていて、服装が子供の家庭のくらし向きを反映するようなことはなかったのだが、タイセンの着ている制服は汚れ放題に汚れ、ところどころ裂け、よれよれになり、下から茶色とも灰色ともつかない色に変わったぼろぼろの下着のぞいていた。

タイセンは臭い、と言って、人々はいつも一定の空間を置いて少年に接した。いわゆる中流

以上の家庭が子供を入れたがるとされるその小学校にはありうべからざる種類の汚らしさであった。実は、それから約一年ほどたつと、東京の学童の大半はこのタイセンと同じような不潔さや同じような栄養失調からくる衰弱にむしばまれることになるのだが、当時は誰一人そんなことは知らなかった。すでに昭和十八年の春、B 29は一日だけとはいえ東京に飛来していて、東京中の小学生が学童疎開という、肉体と愛情の飢餓のなかに叩きこまれるのは、翌年の春から夏にかけてのことだった。

大川岩夫のタイセンへの変貌は、しかし個人的なきっかけから起こったものだった。母親が、その年の夏に死んだのである。だが、わずか数か月のうちに、生活がそれほどまでに変わるのだろうか、という疑問は弘子のなかにもあった。母親の死は家庭の経済状態を変えるものではない。岩夫の父親は、子供たちの身の廻りの世話をさせる人を見つけないのだろうか。事実二歳年下の岩夫の弟はやはり弘子の下級生なのだが、たしかに痩せて、服装も多少みすぼらしげになってはいたけれど、目立つほどではなく、むしろ母親を失った不幸と、悪い兄をもった不運とを同情されているようだった。岩夫の変貌の異様さには、どことなく本人の意志が感じられた。ただ貧寒としているのではなく、攻撃的なものを含んでいた。不幸は悪徳でもありうる。それと気づかぬ幸福のなかにぬくもっている者にとって、存在させずにすませたい何か、抹殺したい何かを、見せつけてくるからである。タイセンとは、そのような悪徳に対して投げつけ

られる憎悪と蔑みの呼称にほかならなかった。

悪徳は具体的な形をとった。タイセンの場合それは盗みであった。三組の子供たちはタイセンから持物を守るためにいつも注意を怠らないうてはならなかった。ちょっと目をはなしたすきに、鉛筆やコンパス、切出し小刀、鉢巻といったものがタイセンの手に渡っていて、うろろとその辺を探しまわったあげく、人から借りなくてはならない破目になるのである。タイセンは盗品をためて自分の財宝にする趣味はなかったから、用がすめばまた気づかれないうちに元にもどした。あるいはしゃあしゃあとそれを使っているところを地主にみつかってなじられれば、眉間のたてじわのせいであつとすぐごみのある冷笑を浮かべてпойと品物を投げ返した。決して返してはくれないものが一つあつた。弁当である。食べてしまうからだ。冬になると、子供たちの弁当は集めて保温器に入れられ、昼食どきに当番が保温器から出してくる。和箆笥の引出しのような形をした大きな木製の盆にびっしりと重ねられた弁当の、上の方に置かれたどれか一つが空になっているのだった。いつ、どうやって食べてしまうのか、どうしても現場をおさえることはできなかった。タイセンは大さわぎしている級友を尻目に、平然と自分の弁当を平らげている。二つも弁当を胃の腑におさめてしまうくせに、行路病者のように痩せているのがなんともふしぎだった。小学生の一番のしみである弁当を食われてしまった子の口惜しさは、齒がみしたいくらいだったにちがいない。

今日弁当箱を空にされた内山という男の子も、弘子の幼稚園でのクラスメートだった。色白で茶色がかった眼のくりくりとした、まつ毛の長い美少年だった。幼稚園時代から音楽的天分に恵まれていて、楽器をよくこなした。小学校では男の子の音楽的天分はあまり人目をひかないが、小太鼓の名手として、上級生にまじって行進の先頭にたつので、女生徒にもよく知られていた。気性も明るくて人に親切なので、先生にも生徒仲間にも人気があった。内山の弁当が盗まれたのをきっかけにして、学級中の男子がいきりたったのは、弘子にもわかるような気がした。

教材をもってかえる途中、弘子は運動場の見える廊下の角で立ちどまった。タイセンはどうなっただろう？

黒い土の上に、少年はまだ倒れたままだった。えびのように曲げたからだをごろりごろりと左右にころがして地べたにのたうっていた。その横に田沢先生がポツンと立ってポケットに手をつっこんでいた。顔をそむけているようだった。「タイセンは先生にまで嫌われている。だれも助けてはくれない……」と、弘子は思った。

陽が照っていた

銀杏の空地の隅の芝草の上に 弘子は仰向けに寝かされていた まともに受ける日差しは



眼をつぶっていても頭の芯を刺し貫き 顔を動かそうとしても 坐った子供の円い膝や立った子の靴が鼻さきをふさいでいる 起きあがろうとすると何本もの手がのびてきて地べたにおしつけられる へたな芝居の子役のようなのろろとした声が頭上をとび交う

「オヤマアカワイソウニ オネツガアルノネ」

「サクヤカラノドガイタイトモウシマシテ」

「アーンシテゴラン アーン」

「オクスリノミマシヨ オクスリ」

「チューシャキ アラッテ」

「カンチヨウネ……」

だれかがパンツに手をかけて脱がそうとする いやッやめて 悲鳴をあげそうになって

我に返った。弘子は網にかかった魚のように身をくねらせる少年の姿を見ながら、ぼんやりと呆けていたようであった。

他者という地獄におちこんだ時の恐怖を弘子はわずかながら想像することができた。それを経験したのは幼稚園時代のこと、大銀杏の思い出にはその息詰まるような記憶も含まれていたのである。

銀杏の空地でした遊びはままごとだけではなかった。「お医者さんごっこ」もしたのだった。お医者役には、仲間うちで自他ともに許すリーダー格の子が、なった。これはいつもきまっただけで、ときおりその子供が役に飽き、お医者役をゆずろうと言いだすと——それはめったにないことだったが——二番目の実力者（複数）の間にはたちまちその地位をめぐる争いが起これ、遊びはお流れになるのがオチだった。お医者役の次に人気が集まるのは看護婦役だが、これには多人数をあてることのできるため、争いは起こらず、医師を親にも子供が婦長格で下っ端を指揮した。薬剤師の役も同様である。お医者「オクサマ」というのもなかなかいい役で、なり手が多かった。これは医院に隣接した場所で、二、三人の仲間と独自に「おうちごっこ」をしていけばよいのである。ときおり「オコウチャ」など運んできて、医院側の総員を慰勞すればそれでよろしい。患者の母親というのもある。これまた、けっこう重要な役であった。医師の質問に答えて子供の容態を説明する。洋服をぬがせたり、きせたりする。薬局によればお金をはらう。あとで「オチューゲン」を届けさせたりする。女の子はまかせているのである。なり手が無いのが「患者」だった。患者になる子は、医師の求めるまま、口をあけたり、深呼吸をしたり、熱をはかれたりする。洋服をぬがせられたり着せられたりする。寝かされたり起こされたり、うがいさせられたり、おなかをおさえて泣くまねをしたり、咳をしたり、目玉をぐるぐるまわしたり、する。容態を説明するのは患者ではなくて母親であり、それにもと

づいて医師が病名と治療の方法を決定するので、患者は運命の命じるまま、ありとあらゆる治療の危険にさらされなくてはならなかった。「オクサマ」がおやつを運んできても、患者は診療室のベッドに寝たきりである。身体の自由をうばわれ、注射といつては木の枝でつつかれ、くすりと称しては花びらを口におしこまれる。患者になる子供が拷問の苦痛を味わっていることには、誰一人気づかないふりをしている。「サアサアガマンシテ ツヨイネエ ツヨイネエ スグオワルヨ」。

そして「ごっこ」の世界では、患者役を演じるのは一人でもよかった。オクサマ、オクサマの子供たち、ねえやさん、受付、電話番、患者と母親をのせてくる自動車の運転手、オチューゲンを届けにくる人……むやみにふえて行く登場人物は、患者役が回避される結果、余儀なく設けられるチョイ役である。だが、患者がいなくては「お医者さんごっこ」はなりたない。弘子は、そのただ一人の患者役であった。

拒否すればよい、とわかっていながら、弘子にはそれができなかった。自分だってみんなと同じように、看護婦さんや薬局の人になりたいのだ。今日はほかの人を患者にしてくれ、と、言えばいい。そんなあたりまえのことが主張できず、よってたかっていた放態からだをいじくりまわされる、物体のような存在におちこんでしまうのは、自分が悪いのだ、とわかっていながら、誰かが「お医者さんごっこしない？」と言いだすと、とたんに患者の運命が弘子を呪

縛した。ああ、ああ、と心のなかで悲鳴をあげながら、救いを求めて友の顔を求める。だがそこに見出されるのは、弘子を患者役にしたてて自分はいけにえになるまいとすることで一致した集団の冷やかな意志でしかなかった。そして弘子の怯えや恐怖は、「お医者さんごっこ」の快感をなりたしめる重要な因子となっていることを知らされるのだった。よく言われるように子供は天使などでは決してない。虐げられるものの存在を求める残忍な動物である。そして「お医者さんごっこ」が人目をさせて大銀杏の下でこっそり行われるのは、子供たちが悪の祭祀にひそむ逸楽の味を知っていたからにはかならない。

浣腸のまねごとをされた日、弘子は母親に、明日からもう幼稚園へは行かない、と言った。事情をきいた母親はまっさおになった。着換えもせずに肩掛だけかけて幼稚園へ走った。いったん玄関を出てから駆けもどってきて、弘子にむかい、こわい顔をして、浣腸とはどんなことをされたのか、と根ほり葉ほりたずねた。唇がふるえていた。「弘子ちゃんがおうちで浣腸するとき、そのところなのね、ほかのところじゃないのね」と念を押すので、いや、それもまねごとだけで実際に触れはしないのだ、と答えると少し安心した顔になった。「やめさせなくちゃ。どうしても」とつぶやいて駆けだして行く母の背中に、「カンチョウだけじゃないよ。ぜんぶよ。幼稚園ぜんぶ」と弘子は叫んだが、聞こえないように、きつと前をみつめて、母親は立ちどまりもしなかった。

あくる日「お医者さんごっこ」の主謀者は先生に呼ばれ、大変叱られて、そのあとはこの遊びをしなくなつた。大銀杏の下へも、子供だけで行くことは固く禁じられ、弘子はまもなく小学校へ上がった。そして人を虐げようとする他人の意志を、はぐらかしたり、道化によって溶解させたり、こちらからうわてに出ておさえつけたりする防衛の手段を身につけて行つた。

大川岩夫が集団制裁にあつてから数日がすぎた。休み時間に、弘子はつぎの授業で使う国語の読本を家に忘れてきたことに気がついた。隣の席と机をくっつけて、見せてもらつてもよいのだけれど、それでは忘れてきたことがばれて、先生にはにらまれる。国語は得意課目だったので、みえっぱり弘子はその課目で失点するのがいやだった。どうにかして、読本を手に入れる方法はないか……ふらふらと廊下へ出て、廊下の壁によりかかりながら考えていた。目のまえを、体操着に着換えた三組の子供たちが、運動場へ出るために走っていた。一人だけおくられて、大川岩夫がやってくるのが見えた。あのとときの傷があざになって額から目の上まで黒ずんでいる。そのときふと弘子の頭に、岩夫から読本を借りよう、という考えがひらめいた。

「岩夫ちゃん」

と、幼稚園時代の呼び方で呼びかけると、げげんな顔つきでこちらを見た。ほとんど、口をきいたことのない相手なのである。

早口で頼みごとを伝えながら、頬がそまって行くのがわかった。思いがけないほどあっさり  
と岩夫は頷き、とってかえして読本を持ってきた。走りながらポイと弘子の手に渡すと、その  
まま運動場に通じる階段を駆けおりて行った。

読本には、裏返しにした包装紙でいてねいに蔽いがかけられていた。手ずれしてはいるが、  
しみ一つない、きれいな本だった。開けてみると、ところどころ細い字で書きこみがしてある。  
赤鉛筆で引かれた傍線も、きちんと定規をつかった跡がみえ、几帳面な性格をあらわしていた。  
蔽いの裏表紙に毛筆で「五年三組 大川岩夫」と記してある。そのみごとに筆跡を眺めながら、  
弘子は幼稚園の退けどき、昇降口で岩夫を待っていた母親の姿を思いだしていた。めだたない  
地味なみなりの、和服姿の母親だった。岩夫によく似た、しっかりとした目鼻だちの、賢母と  
いった型の人だった。岩夫の几帳面な性格はきつと母親ゆずりなのだろう。

授業などうわの空で、弘子は岩夫のことばかり考えていた。一度先生に指されて、彼の書き  
こみをそのまま借りて答えた。終わるとすぐ、読本を持って彼の教室へ行った。

廊下の窓が開いていて、中が見え、着換えする生徒たちでごった返しているのがわかった。  
彼は弘子の姿を目の端でとらえるとすつと席をはなれて廊下に出てきた。人目をひかぬよう行  
動するのに馴れきっているのが感じられた。読本を受けとり、すぐ教室へもどろうとする。つ  
かむようにしてその腕を弘子が引っぱった。そのまま引き寄せて、耳もとに何か囁いた。驚愕

に似た表情が少年の顔に浮かび、目をまるくして彼女を見つめた。それからこんどは彼の方が少女の肩をかかえるようにして、廊下の角に連れこんだ。しばらく頬を寄せあって、二人は何ごとか相談していた。

十二月八日の大詔奉戴日、弘子の小学校は「行軍」と称する行事を行った。九段に集合して靖国神社の参拝に発し、市ヶ谷を抜けて四谷に出る。現在は公園になっている若葉町小学校の校庭で小休止ののち、東宮御所を左手にして、大宮御所の門前を外苑へとくだり、目的地である明治神宮の参拝をもって行軍は終了する。男子は帽子のあご紐をおろし、長ズボンにゲートルを巻き、肩から吊るした水筒の紐の上から握り飯二個ときめられた弁当を包んだ黒っぽい風呂敷を帯のように胸に巻きつけていた。学年は中隊と呼ばれ、学級は小隊であった。ときおり「伝令」が走ってきて、前方からの命令を伝えて行ったりした。

いまごろは小休止も終わって、弘子の好きな大宮御所の木立に包まれた御門のあたりを、歩調をとりながら行進しているころであろう。冬日が濃い緑の色をやらわらかく包んでいることだろう。その同じ陽の光が、金色の帯になって、銀杏いちょうの枝の合間から地上に届いていた。銀杏は葉をほおとしつくし、地面には黄いろい葉にまじってぎんなんもおちていた。拾われないままに枯葉の下でむれて行くぎんなんの匂いが、日だまりの暖かさを牛舎のような生理的なぬく

もりに変えている。その中を犬の仔のように駆けては、立ちどまって、少年はぎんなんを拾っていた。ハンケチに入れて、あとで弘子にくれるのだろう。彼女は銀杏のうろの下に自分のハンケチを敷き、その上に赤いバスケットを置いた。幼稚園時代、毎日持って通ったそのバスケットの中には、海苔ですっかりくるんだおむすびのほか、母親に頼んで作ってもらった卵焼きと野菜の煮物のつまったおかず入れもはいついて、ずっしりと重たかった。少女は銀杏の根かたに腰をおろし、少年が乳の実を集め終わって、脇に腰をおろしに来るのを、行儀よく膝に手を置いて待った。

鳥影が地面をとんで、あたりはしんとしている。

ときおり「行軍」に行かない幼稚園から、じれったそうなオルガンの音に乗って、眠くなるような間のびした園児のうたごえが聞こえていた。



あとがき

一九九四年といえば、ちょうど今から十年前になる。『文芸人間学の試み——日本近代文学考——』と題する書物を、近代文芸社から出すことができた。それは一九七七年創刊の『豎琴』という女性のみの文芸同人誌に発表してきた近代日本文学関係の評論をまとめたものだった。

その後『豎琴』は一号も途絶えることなく今に続いて、創刊当時の同人たちの年齢に近い気鋭の新世代が次々と加わり、三〇代から七〇代まで幅広い年齢層の同人によって運営されている。その歩みは四半世紀を過ぎ、二〇〇二年には五〇号という節目を迎えた。

その翌年つまり二〇〇三年、私は長年勤めた大学を退職した。

人にものを教えるというのはかなり大それた仕事である。いつも一種の疚しき、場違い感に付きまとわれていたことが、離れてみてよくわかった。人を相手にする時間から逃れてひとりになれることが『豎琴』の存在理由だったのかもしれない。ここに書き溜めたものには、その

時々の思いが凝縮されていて、読み返すと大変懐かしい。

そこで今回はここから創作数編を選んで本にすることにした。威張ってお目にかけるほどのものではないが、退職を期に、お世話になった方々に、お礼の気持をこめて、読んでいただきたいと願っている。

《My Lost Childhood》と題した最初の三篇は、幼年時代の思い出をもとに構成したもので、一九七〇年代後半から八〇年代前半に書かれた。背景となる時代は日中戦争から太平洋戦争へと日本が動いて行くときである。私の勝手な思い込みでなければよいが、いまの日本とそれを取り巻く世界情勢はあの時代によく似ている。社会のいたるところで「戦前」が確実に復活してきているように思われてならない。一見平和な日常にしのびよる擾乱の気配、そのなかで地震を察知する小動物のように、何にともなくおびえていた幼い者たちの不安が少しでも伝えられれば、と思う。

『弁天の仇討』は一九九〇年代の作である。じつは高校時代に『最後の仇討』と題して下手な時代小説のまねごとを書いた覚えがある。時代が大きく動いていくとき、節操などはかなぐり捨ててそこに乗って行ける人間と、乗っては行けない人間があることを、戦争をはさんで百八十度の転換をとげた日本で青春を迎えた世代の者はよく知っている。滅びたはずのイデオロギーに殉じて、文明開化の世になってから行われた「仇討」というものに、興味をひきつけられ

たのだった。『弁天』はそのときと内容はまるで違ってているが、テーマには共通のものがある。そのころ希望に輝いていた「憲法九条」がいま氣息えんえんとしている。六郎のように時代遅れの人間でないと、「戦前」を食いとめることはできないのだろうか。

なおこの作品が発表直後『文学界』の同人雑誌評欄で勝又浩氏から好意的な批評を頂戴したことを、往時の感謝の思いとともに付記したい。

最後になったが、十年前のデータを忘れずにこの企画に招きいれてくださった近代文芸社、愛らしい本にしてくださいだった担当の宝田淳子氏に厚くお礼申し上げます。

二〇〇四年三月

著者

初出一覧

坂と赤マント

一九七九年三月

『豎琴』 四号

乳の実（旧題「銀杏」）

一九八〇年三月

『同』 六号

回復期

一九八一年九月

『同』 九号

弁天の仇討

一九九五年四月

『同』 三五号

現代日本の短編作家シリーズ 19

---

---

## My Lost Childhood

---

---

第一刷——2004. 4. 10

著 者——中 島 公 子 (なかじま こうこ)

発行者——福 沢 英 敏

発行所—— 巖 近 代 文 芸 社

東京都文京区目白台2-13-2

TEL (03)5395-1199 (編集)

(03)3942-0869 (営業)

FAX (03)3943-1232

印 刷—— 信 毎 書 籍 印 刷 株 式 会 社

製 本—— 株 式 会 社 小 泉 企 画

© Kouko Nakajima 2004 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

---

ISBN 4-7733-7142-0 C 0093

落丁・乱丁本はお取り替えいたします



9784773371420



1920093016001

ISBN4-7733-7142-0

C0093 ¥1600E

定価： 本体1600円 +税

## 著者略歴

1932年東京生まれ。

早稲田大学大学院博士課程修了(フランス文学)。

元明治大学教授。

著書『文芸人間学の試み — 日本近代文学考 — 』

『お話文芸思潮 — ヨーロッパ文化の源泉 — 』

訳書 H. ルソー 『キリスト教思想』

F. モーリヤック 『愛の砂漠』

『まむしのからみあい』

『海への道』

F. マレ=ジョリス 『夜の三つの年齢』

L. ジャンドロン 『すばらしい誕生の物語』

J-M. モレットイ 『いのちはだれのもの』

ほか多数

文芸誌『豎琴』同人。